二年学年だより

No.　7	10 月号
令和５年 10 月２日発行	
２０５ＨＲ	

○無知・ぬるい全力・後悔・今しかない・本当にお願い

自分が 20 期生として過ごした３年間は、そこそこ充実していた。毎日６時 50 分くらいに家を出て自転車で学校に行って、30 分くらいティーバッティングをして、クラスの中では他愛のないことで友人と爆笑し、宿題の出来が悪く授業中に叱られることもあり、テストは自分の好きな教科で 100 点取るためだけの勉強をし、部活動が大好きで、完全下校ぎりぎりに急いで荷物をしばって元気よく「さようなら」を言って帰る。そんな日々の繰り返し。３年生になったら、頑張ることが受験勉強だけの一点集中で、本気で考えて勉強すれば点は上がっていくから、だんだん面白くなっていった。部活動の仲間たちとも近況報告をしながら、勉強でも切磋琢磨したような気がする。そんな高校生活だった。

大学を卒業して、すぐに教員になった。１校目は松山市内の中高一貫の進学校、２校目は地域に一校の南予の最端の学校。自分の過ごしたことのない学校、そのたったの２校だが、自分の高校時代と比べると、彼らはかなり“青春”っていうものに全力だった気がした。“若さ”とかじゃなくて、“全力であること”のキラキラした輝きを見せつけられた気がした。なんだかちょっと悔しかった。「高校生活って全力でやったら、こんなに面白くできるんか(できたんか)」というのが正直な気持ちだった。そこからの自分にできることは、その２校で教員として学んだことをそのうち母校で生かせられれば、ということだけだった。

別に今の母校が「イマイチだな」なんて思っているわけではない。「自分が過ごした高校時代って自分の中では充実していたけど、実際は大したことなかったんだな」と思っているわけでもない。しかし、日々心にひっかかるモヤモヤはきっと、この学校でもっと“全力”の高校生活をやってほしいと思っているからだ。36 期生に切に願うのは、一つだけだ。自分の周りにあることに、もっともっともーっと“全力”であってほしい。好きなことだけじゃない、最低限や平均点を超えたらいいわけじゃない。苦手なことも、不安に感じることも、やったことないことも、自分のキャラじゃないなぁなんてことも、目の前だけじゃなくて、後ろにあることも。後ずさりをせず、傍観者にならず、弱らず、しおれず、ふてくされず、かっこつけずに、逃げずに向き合って、もっと全力をだしてほしい。そうして、潜在能力を解放して、「自分がやらなきゃ誰がやる」「自分にしかできないことがある」って自分のことを誇りに思って、強く逞しくなって、近くにいる人を幸せにしながら、社会にでて自分らしく暴れていってほしい。

あんまり「後悔した」と思いたくない。しかし、全力で過ごせたかどうか振り返ると、ちょっと視野が広がると「ぬるい全力」だったような気がする自分の高校時代。めちゃくちゃ後悔している。「これが本当の“後悔”か」と自分が高校時代に過ごしたのと同じ教室に向かいながら、毎日噛みしめている。

36 期生諸君、今しかない。

自分に対しての嘘や言い訳や弱音はゴミ箱に捨てて、なんでもどこからでもいいから、“全力”というのに本気で取り組んでみてください。本当にお願いします。

（２０５ＨＲ担任）

ウチとソト

歩きながらファスナーを下ろしてシャツの裾をズボンに入れる男子。いつでもどこでもそれこそ授業中でも前髪命と言わんばかりに櫛で整える女子。当たり前のようにしているが、教室も廊下も「ソト」である。身だしなみを整えるという私的な「ウチ」の振る舞いをする場所ではない。それを不快に感じる人もいる。学生に限らず最近は「ウチ」と「ソト」の境界を持たない振る舞いを見かけるが、自分だけの世界ではないのだから他者の存在を意識してウチとソトをきっぱりと区別すべきである。　（２０５ＨＲ副担任）